

いい友達だね、よかったね

平成 30 年 10 月 12 日記

相談は 5 月 7 日に入った。中学 3 年生の娘 A さんが、連休明けから学校に行っていないとのことだった。公務員の父親にパート勤めの母親、小 6 の弟がいる。

中学 2 年になり担任が新任の女性教師に代わり、クラスみんな厳しく生活指導されるようになった。授業中は勿論、掃除中も私語厳禁、きれいなハンカチにティッシュの持ち物、持ち物に名前がないと、先生がどんどん書き入れる。これには彼女を始めクラスの 12, 3 人が反発し始めた。女子 7 人がグループを作って先生の靴箱に抗議文を入れたり、先生に口答えするようになった。

クラスでただ一人漢字テストは満点を取り続け、中間・期末試験では 200~210 点も取る彼女は、そのグループのリーダー的存在になった。しかしグループは 2 学期に入り、集団で万引きするも、ばれずに済み面白さを覚え、万引きを繰り返すようになった。授業中みんなで、菓子を食ったりガムを噛んだりし始めた。

グループの何人かは“ワル”グループの男の子達と付き合い始めた。また、仲間同士で泊まり合うようになった。当然に仲間の家が交替で溜まり場になり、何人かはたばこを吸い始めた。みんな持ってるからと親を騙し、ポケベルを持ち、時間・所構わず連絡を取り始めた。そんな折彼女は、中間・期末試験で 120~140 点台しか取れなくなり、部屋で泣き伏すこともあったという。

まずは本人に会った。下を向き、黙ったままだった。塾の生徒でもあったので、「そう、この間 A が休んだ英語の授業の時、あの頭のいい S が『先生、カメって何?』聞いてきたんだよ。『え? カメ?』と聞き返すと、『カメ、いや、c, a, m, e のカメ!』、みんなドッと笑ったよ、c o m e (コメ) った奴だよ」すると、彼女はクスッと笑った。続けて、休んだ英語を教えた後、「〇〇たちに無視され、学校で居場所がないんです」と、彼女はポツリと話した。「先生、私ね、毎日学校から帰ってきてもお母さんがいなく、ずっと寂しかった」、「私ね、お父さん、お母さんの期待に応えるのにね、必死だったんだ」と吐露し始めた。

仲間からも話を聞いたが、なかなか口を割らなかった。10 日程で状況が分かった。万引きや菓子を食った件、すべて A さんがやろうと強要したからやったのに、B 先生に追及され「みんながやろうと言ったので万引きした、菓子はみんなですべて買って食べた」と、A さんが「いい子ぶりっこ」した。だから 4 月の下旬、仲間 6 人が昼休みに A さん呼び出し、今までの不満を彼女にぶちまけた。これが A さんの不登校を決定づけた。

その後彼女は、当教室で中学校の出席認定を受けながら学習し、一方で私が

間に入り、仲間一人一人と会って話し合いを続けた。すんなりとはいかなかったのは、勿論のこと。そのご父兄にも協力をお願いした。9月に入り私は、彼女と話し合い、校長の理解を得て、私の知人が運営する老人ホームに住み込みで行き、高齢者の皆さんの生活のお手伝いをした。

「お嬢ちゃんは、こんなお年寄りのお手伝いをして、感心だねえ」、「ほんと、いい子だねえ、ありがとう」、「お嬢ちゃんはいくつ?」、「そう、15歳なの。あれ?学校は?」。9月下旬彼女は、居たたまれなくなって、帰ってきた。でも、ほんとにいい経験だったと言う。

再び彼女は、当教室で中学校の出席認定を受けながら学習した。彼女やご両親から進路の相談もあり、中学校の先生との話し合いも始まった。仲間たちにも彼女が帰ってきたことが伝わった。

仲間たちが動いた。12月初めの土曜日午後4時半過ぎ、母親から電話があった。「B子から電話があり、みんなが話したいと言うので、5時にC公園に行ってくる」と言って、Aが自転車で出かけた、とのことだった。急いで車を出し、母親を載せてC公園に向かった。近くに車を止め、母親と一緒に木陰で様子を伺った。ベンチや地面に丸く座り、話し合いが始まった。20分程経ただろうか、笑い声が聞こえた。

お互いに悪かったこともあったし、言いたいこともあった。でも、このまま卒業しちゃうのは嫌だよね、仲間だもん。一人ひとり思いを話し、謝り合ったよと、Aさんから聞いた。「いい友達だね、よかったね」と、母親は涙ぐんだ。